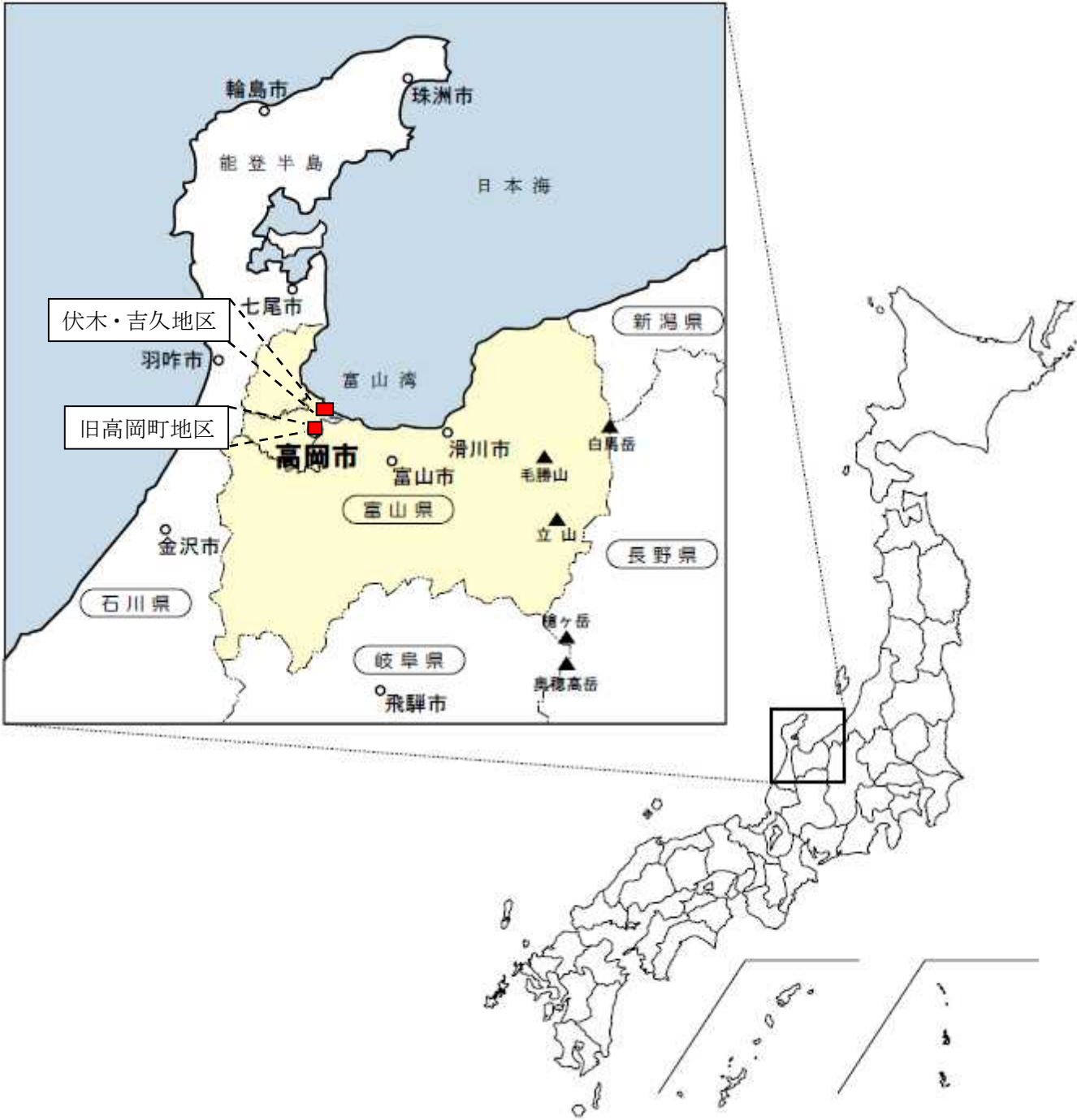
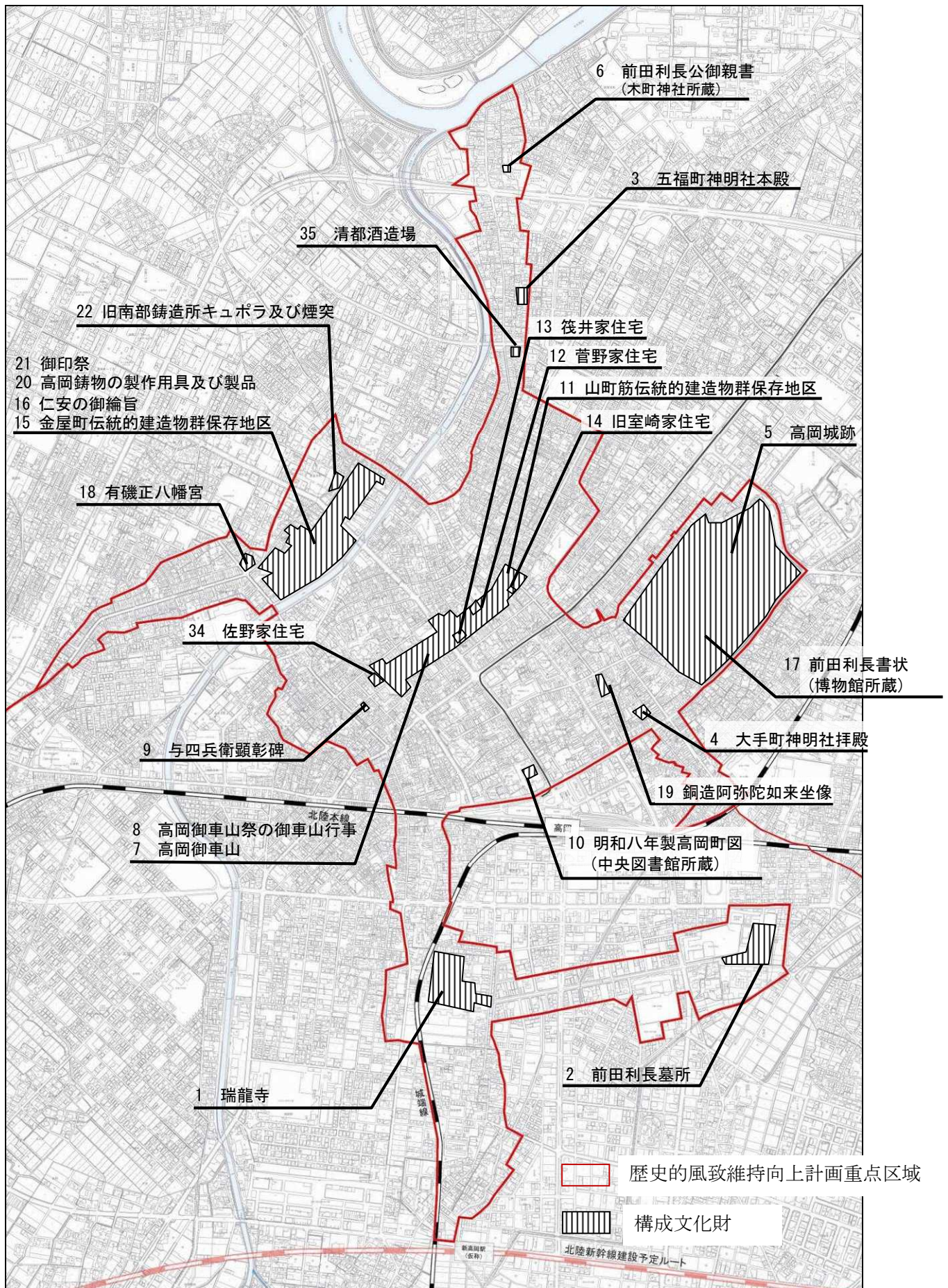


① 申請者	高岡市	② タイプ	<div>地域型 / シリアル型</div> <div> <input type="checkbox"/>A <input type="checkbox"/>B <input type="checkbox"/>C <input type="checkbox"/>D <input type="checkbox"/>E </div>		
③ タイトル					
加賀前田家ゆかりの町民文化が花咲くまち高岡 一人、技、心一					
④ ストーリーの概要（200字程度）					
<p>高岡は商工業で発展し、町民によって文化が興り受け継がれてきた都市である。高岡城が廃城となり、繁栄が危ぶまれたところで加賀藩は商工本位の町への転換政策を実施し、浮足立つ町民に活を入れた。鋳物や漆工などの独自生産力を高める一方、穀倉地帯を控え、米などの物資を運ぶ良港を持ち、米や綿、肥料などの取引拠点として高岡は「加賀藩の台所」と呼ばれる程の隆盛を極める。町民は、固有の祭礼など、地域にその富を還元し、町民自身が担う文化を形成した。純然たる町民の町として発展し続け、現在でも町割り、街道筋、町並み、生業や伝統行事などに、高岡町民の歩みが色濃く残されている。</p>					
⑤ 担当者連絡先					
担当者氏名	高岡市教育委員会文化財課 主事 流森 清悌				
電 話	0766-20-1453	0766-20-1453	0766-20-1453		
E-mail	k-nagaremore02@city.takaoka.lg.jp				
住 所	富山県高岡市広小路 7-50				

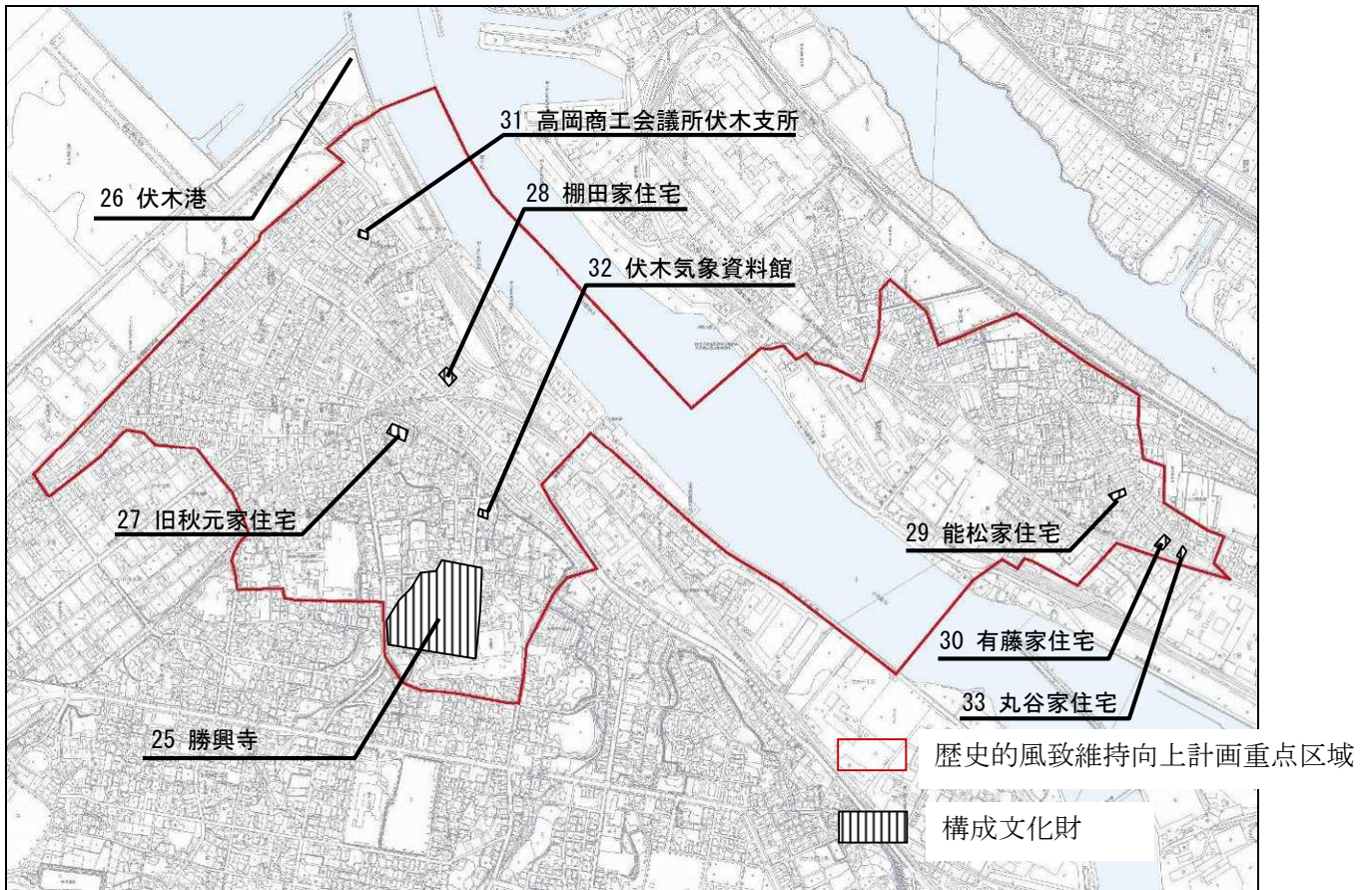
市町村の位置図（地図等）



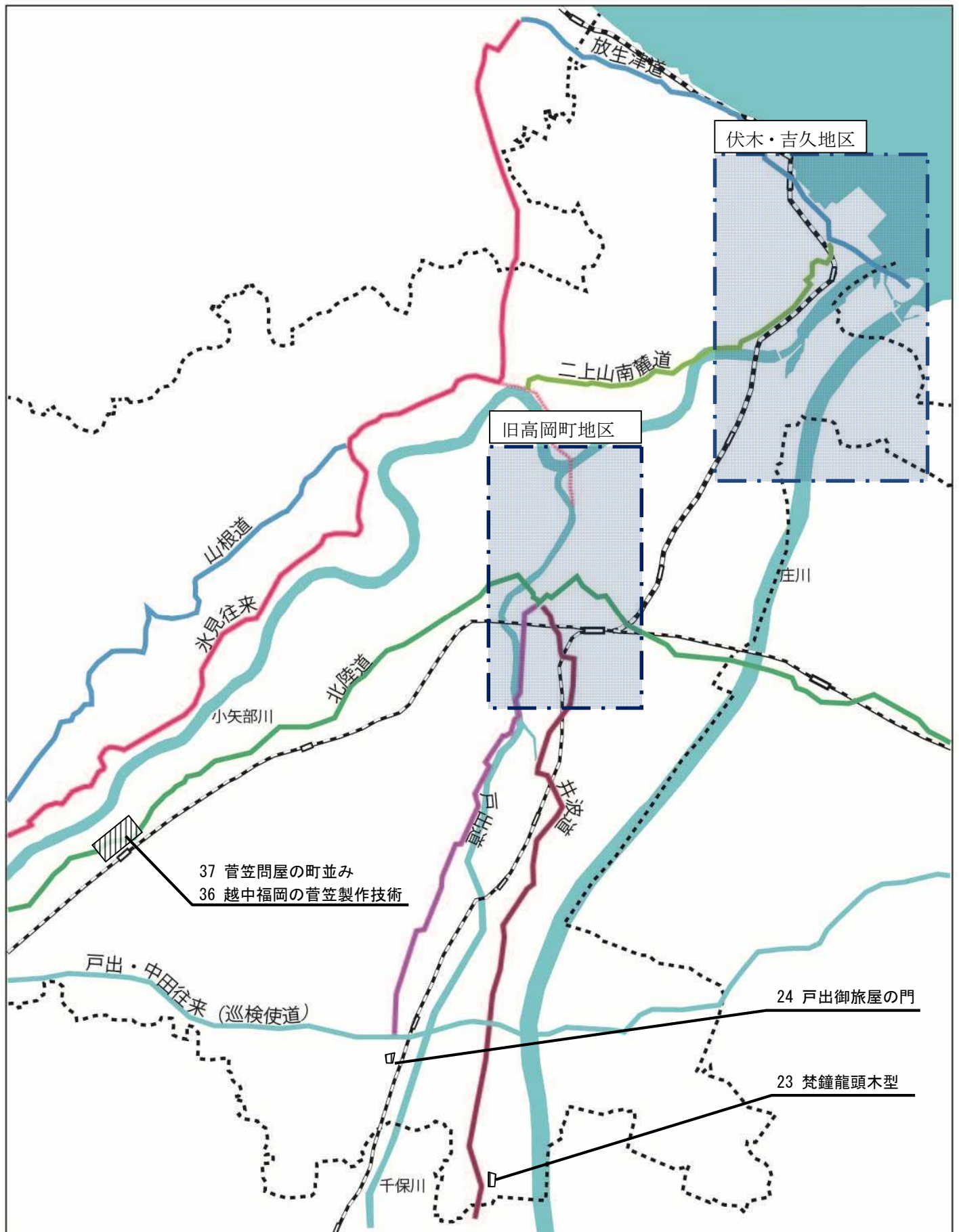
構成文化財の位置図（地図等）（旧高岡町地区）



構成文化財の位置図（地図等）（伏木・吉久地区）



構成文化財の位置図（地図等）（高岡市内全域）



ストーリー

高岡城と城下町の形成

高岡は、北陸を代表する穀倉地帯を背後に控え、北は富山湾に面し、雨晴海岸からは海越しに 3,000 m 級の立山連峰の大パノラマを見ることが出来る、美しく豊かな自然に恵まれた環境を有し、古くは旧石器時代まで遡る人々の営みが見られた。

現在の高岡の基盤は、近世初期に形成された。加賀前田家二代当主前田利長は、若き頃に山城（守山城）から俯瞰し、この高岡の地が要害としての軍事的な機能だけでなく、水陸交通の要衝として経済的な機能を合わせ持つ理想的な地であると見抜き、慶長 14 年(1609)、高岡城を築城した。荒れ地であったにもかかわらず、この地で築城できる機会を心待ちにしており、驚異的な早さで建設工事を進め、築城開始からわずか半年で入城するに至った。城下町の一面に、資材の集積と調達を行うための拠点(木町)を設けたことや、砺波郡の西部金屋から 7 人の鋳物師を招き、無租地とするなどの厚い保護や特権を与え、鋳物づくりを行う鋳物師町(金屋町)を設けたことで、城下町としての繁栄を図った。

しかし、高岡城を創建し 400 余年に渡る高岡市の発展の土台を築き上げた人物である利長は、在城わずか 5 年で他界してしまう。家臣団はことごとく金沢に引き揚げ、次いで一国一城の令により、高岡城は廃城となったので、城下町の歩みを始めていた高岡は、たちまち絶望の淵に突き落とされたのであった。



城下町から商工業都市への転換

城がなくなれば、城下町は存在の意義を失ってしまう。高岡は、新設の政治都市として日が浅く、町を存続するにはそれ相応の対策がなくてはならない。三代当主前田利常は、一朝の夢に終わるか危ぶまれた高岡の繁栄を、活を入れて立て直したのである。高岡町民の他所転出を禁じ、その上で、布御印押人を置くことで高岡を麻布の集散地とした。さらに、御荷物宿、魚問屋や塩問屋の創設を認め、城跡内には米蔵と塩蔵を設置するなど、商業都市への転換策を積極的に講じていった。

利常は、利長が高岡に相当の希望をかけていたことを知っていた。だからこそ、商業都市への政策転換を進める上でも、利長が築き上げた町割りなどを活かした形で行われた。異母弟である自分に家督を譲ってくれた利長への恩義も深く、菩提のために造営した壮大な伽藍建築を持つ瑞龍寺や異例の規模を誇る墓所は、利常自身のみならず、町民に永く利長の遺徳をしのばせ、併せて町の繁栄を願う気持ちも込めて建立された。また、利常は高岡が軍事拠点としての機能を失うことに対する危惧を持っていた。高岡城にあっては、平和的利用として米塩の藩蔵を建てることによって幕府に干渉の口実を与えず、城の郭や堀は完全な形で残すことができたのである。その姿は今日でも変わらない。利常の優れた経営手腕は、現在も数多く残る関連文化財群に垣間見ることができる。

高岡の近代化

利常の没後も加賀藩ではその意思を継ぎ、高岡の商工業発展のための方策を打ち出していった。利常によって再建された高岡は、商人の町であると同時に職人の町でもあり、藩政時代を通じて領内の鋳物業界を支配し、町としての特色が根付いていくとともに町民自身も自ら競い合いながら発展していった。最初は、鍋・釜などの生活用具、農具等の鉄器具類が作られていたが、次第に銅器の鋳造が始まり、18 世紀後半になると香炉・花瓶・火鉢・仏具等の文化的な品物の需要が高まり、装飾性の高い製品が

製造されていった。銅器製造が盛んになるにつれて、これらの製品を売りさばく商人や問屋も次第に力をつけ、北前船（バイ船）交易などによる国内流通の発展も伴い、江戸時代後期には全国各地に広い販路を確保し、海外貿易にも乗り出していくのである。

一方、伏木港の重要性は、砺波・射水両郡の穀倉地帯で収穫された米を各地の御蔵等から集めて伏木・吉久へ川下げし、伏木港から大坂・江戸へ廻米として積み出すという流通ルートが確立され、18世紀以降は、加賀藩全体の物資の集散地として、また、北前船(バイ船)の寄港地としてさらに強まることとなった。港町には何軒もの廻船問屋が軒を連ね、藩の経済の一翼を担う富をもたらすまでに成長した。流通の拠点として水陸の両路の基盤整備が進み、高岡が米や綿、肥料など生活に必要な不可欠な物資の取引拠点として隆盛を極めた様子は、「加賀藩の台所」として後世に語り継がれている。

物資の取引拠点として富を得る一方、藩は町民が華美に流れるのを憂えていた。町民が贅沢を見倣うと勤労を厭うようになり、経済の基本を脅かすと考え、平生の儉約令を発していた。しかしながら、お祭りを盛大に行うことは奨励していたため、町民にとってはお祭りの日を待ちわび、日々の抑圧された不満を緩和するものとして盛大に行ってきた。

御車山祭はその代表的なもので、七基の御車山には彫金・漆工・染織など高岡の伝統工芸の粋を集めた豪華な装飾が施されている。山車は利長が町民に分け与えたことに起源を持ち、当初は素朴なものであったが、各部材の製作・購入・修理等は、開町以来培われてきた町民の経済力・工芸技術によるものである。山車を持つ各町が競うように絢爛豪華な装飾を施しながら現代まで伝承されている姿は、自ら主体となって地域に貢献してきた町民の心意気を象徴するものである。



町民の心意気とものづくりの職人魂

町民自身が担い手となり、地域に富を還元し町の発展に貢献してきたことは、近代以降にあっては継承されていった。明治の文明開化といった全国的な時代の変遷を経ても、町民にとっては商売継続の望みを失うことなく、むしろ実力を存分に発揮する長年待ち望んでいた好機としてすら捉えられるものであった。事実、維新後は県庁の所在地ではないためのハンディキャップを負いながらも、常に県都に比



肩し日本海側屈指の商工都市として気を吐いている。とりわけ、鋳物業をはじめとする伝統産業は、繊細な技術やデザインを誇り、全国有数のものといっても過言ではない。

現在でも、町割り、街道筋、町並み、生業や伝統行事などに町民の歩みが独特の気風として色濃く残されている。競い合いながら発展を続けてきた町民の気質は、DNA としてこの町に住む人々に受け継がれており、高岡はまだ発展の最中にある。歴史と文化の保存・継承のみならず、歴史資産を活かした取組みを進めながら、新たなまちの文化や魅力の創造に繋げていく。

ストーリーの構成文化財一覧表

番号	文化財の名称 (※1)	指定等の状況 (※2)	ストーリーの中の位置づけ (※3)	文化財の所在地 (※4)
1	瑞龍寺	国宝・重要文化財 (建造物)	高岡開町の祖前田利長の菩提を弔うために建てられた曹洞宗寺院。外様大名の菩提寺としては壮大過ぎるとされるその理由には、前田利常にとっては、自身を次期藩主へ抜擢してくれたことに対する並々ならぬ恩義があったことや、高岡の町民に長く利長の遺徳をしのばせ、併せて町の繁栄を授ける意図を託したものと考えられる。	
2	前田利長墓所	国指定史跡	近世大名の個人墓所としては総面積約1万坪と、破格の規模を誇るものである。前田利常により造営され、瑞龍寺と墓所をつなぐ道路である八丁道と併せて整備された。ともに前田利長を偲ぶ意図が込められている。	
3	五福町神明社本殿	市指定文化財 (建造物)	慶安5年(1652)前田利常によって前田利長墓所に建てられた鎮守堂の遺構で、瑞龍寺の造営と並行するものであったことが明らかとなっている。この場所へは明治初年に移築された。	
4	大手町神明社拝殿	市指定文化財 (建造物)	五福町神明社本殿と同じく前田利長墓所に建てられた拝殿であり、明治維新による廃仏毀釈と神仏分離の動きを受けて分割して移築されたものである。	
5	高岡城跡	国指定史跡	築城技術が高度に発達した近世初頭の縄張りをほぼ完全な姿で留めている城跡である。廃城となった後も、高岡城本丸の殿閣撤去跡に新しく米塩の倉庫が建てられたことで城跡の荒廃を防ぐとともに、城下町から商工の町に転向する第一歩を歩んだ。	
6	前田利長公御親書	市指定文化財 (古文書)	高岡城の築城と城下町の建設に先立ち、その資材となる木材集散地として町立てした木町の成立に際し利長の厚い保護のあったことを示す史料であり、木町は、高岡の玄関口として重要な役割を果たしてきた。	
7	高岡御車山	重要有形民俗 文化財	高岡御車山は7基の山車で構成され、形式は二番町の車輪が2輪であることを除き、ほぼ酷似している。増減を許すことなく現代まで7基であり、高岡金工漆工の粋を集めた総作品として高い美術工芸的価値を有するものである。	

8	高岡御車山祭の御車山行事	重要無形民俗 文化財	お祭りを盛大に行うのは加賀藩の政策であり、百姓町民にとっては神様に感謝祈念を込める行事であるとともに普段の俟約から解放される不満緩和の安全弁として機能した。町民自身が楽しむために自らの富を投資し、地域経済を動かしていたことが分かる代表的な行事である。	
9	与四兵衛顕彰碑 (弥真進大人命旧跡)	—	津幡屋与四兵衛は、御車山と類似の山を作った近郊の町との騒動の際に、御車山の由緒を死守しようとした義人として山町の人々から崇められている。毎年4月3日に祭祀が行われている。	
10	明和八年製高岡町図	市指定文化財 (古文書)	高岡の町図としては、現存する最古の部類の町図であり、明和年間の高岡町の街区、用水の状況、高岡城跡などが明記されている。所在地を明確にするとともに、米納地子地も記載されていることから、当時の農業生産力を知ることにも出来る重要な史料である。	
11	山町筋重要伝統的建造物 群保存地区	重要伝統的 建造物群保存地 区	重厚かつ繊細な意匠を持つ土蔵造りの伝統的建造物が立ち並ぶ地区であり、近世初頭には米商会所が置かれ、綿市場の拠点として高岡の経済的な発展に大きく貢献した。高岡御車山を所有・継承していることから「山町」と呼ばれている。	
12	菅野家住宅	重要文化財 (建造物)	菅野家住宅は、質の高い伝統的な町家が多く残る山町筋の建物の中でも、大規模で質の高いものとして評価を受けている。高岡政財界の中心的存在として財を築き、明治33年の大火にあっても直後に再建されるなど、高岡の隆盛を物語る土蔵造り建物の代表格である。	
13	筏井家住宅	県指定文化財 (建造物)	筏井家住宅は、在来の町家にみられる伝統的技法を踏襲しながらも、塗壁による防火構造、洋風の構造・意匠を導入した質の高い建造物として貴重なものである。代々、綿糸などの卸商を営んでいた商家であり、山町の発展に寄与してきた。	
14	土蔵造りのまち資料館 (旧室崎家住宅)	市指定文化財 (建造物)	旧室崎家住宅は、土蔵造りの大規模な町家の例であり、質が高く、背後の土蔵や庭など、屋敷の様子も旧状をよく留めている。もとは綿糸や綿布の卸商を営んでおり、今では資料館として公開されている。	

15	金屋町重要伝統的建造物群保存地区	重要伝統的建造物群保存地区	金屋町は、高岡開町に際し前田利長が鋳物師を招き、鋳物づくりを行わせたことに始まる鋳物師町である。装飾品や美術工芸品として銅鋳物が作られ、人々の多様なニーズを研究し、その需要に基づき努力を続けたことで、一大生産地としての発展を遂げた。	
16	仁安の御綸旨	市指定文化財 (古文書)	鋳物師に対して全国に鍋・釜・鍬・鋤を販売することを命じ、そのため諸役を免除し全国通行の自由を保証した御綸旨であり、この御綸旨を活かして鋳物業に従事してきたことが窺える。	
17	前田利長書状	市指定文化財 (古文書)	前田利長が高岡へ居城を移す際に、側近に命じた事項が記された史料であり、金屋町の発祥を示すだけでなく、町割りが武家地の屋敷割と同じ頃に行われていることを示しており、城下における金屋町の高い位置付けを指摘できる重要なものである。	
18	有磯正八幡宮 (本殿・釣殿・拝殿及び幣殿)	登録文化財 (建造物)	金屋の氏神として、石凝姥命を祀っている。今も鋳物師たちの信仰を集めるものとして、「鍋宮様」とも呼ばれ、年に一度「御印祭」を行っている。祭には、前田利長の遺徳を偲ぶとともに、長く続いてきた鋳物業への感謝の意も含まれる。	
19	銅造阿弥陀如来坐像	市指定文化財 (彫刻)	高岡大仏として市民に親しまれている銅製大仏であるが、元は木造であった。途中、資金難により銅製大仏での建立が中断するも、高岡銅器職人の献身的な動きと、市民の浄財により開眼供養に至った姿には、町民の町として発展した誇りが垣間見える。	
20	高岡鋳物の製作用具及び製品	登録有形民俗文化財	金屋町を中心に、江戸時代以来行われてきた鋳物製作に用いられた用具類とその製品を収集したものであり、高岡鋳物の製作技法の変遷を良く示す多様な用具が収集されており、鋳物生産の実態を示す貴重な史料である。	
21	御印祭	—	有磯正八幡宮の神事であり、前田利長の遺徳を偲ぶための祭である。前夜祭には「弥栄節」と呼ばれる作業歌に合わせて町流しを行うなど、今でも引き継がれて行われている。	
22	旧南部鋳造所キュポラ及び煙突	登録文化財 (建造物)	高岡の鋳物技術は、木製のふいご「たたら」を踏んで溶鉄や溶銅を得ていた手法から、新式溶鉱炉で鋳造する手法へ変遷していった。この建造物は、金屋町の近代化の歴史を示す遺構として貴重である。	

23	梵鐘龍頭木型	市指定有形民俗文化財	梵鐘を鐘樓の梁に吊るすために上蓋にしつらえた龍の形状の環状部を指し、戸出西部金屋に代々伝わっている。これは、戸出西部金屋に鋳物業が盛行したことを証明する資料ともなるものである。	
24	戸出御旅屋の門	市指定文化財 (建造物)	前田利常により建てられ、御旅屋として主屋と3棟の土蔵棟で構成されていたと伝えられている。建物は明治に一部倒壊され、門だけが残されているが、江戸時代初期の御旅屋の面影を残すものとして貴重である。	
25	勝興寺	重要文化財 (建造物)	勝興寺は、戦国期には越中における一向一揆の拠点寺として機能してきた。近世には本願寺や加賀前田家とも関係を強め、藩政期を通して門前地を寺内町として支配下に置いていた。寺内町が舟運業で賑わいを見せる中でも核としてその存在を示し、現在でも寺内町・港と一体となった景観的・経済社会的なつながりを伝えるものとして貴重である。	
26	伏木港（伏木浦）	—	北前船（バイ船）の中継地で、近世・近代にいたるまで盛んに交易が行われ、日本海沿岸の重要な港湾施設として機能してきた。	
27	伏木北前船資料館 (旧秋元家住宅)	市指定文化財 (建造物)	秋元家は、北前船の交易により繁栄した伏木地区にあり、当初は小宿（船主や水夫等の宿泊施設）として、時代が下るにつれて廻船問屋として繁盛した。明治期の廻船問屋の屋敷や建物の様子をよく留める貴重な歴史建造物として一般公開されている。	
28	棚田家住宅	登録文化財 (建造物)	棚田家住宅は、主屋、寄付待合、水屋、茶室及び三棟の土蔵で構成される建物群で伏木が北前船交易によって繁栄していたことを物語る廻船問屋の建造物である。	
29	能松家住宅	登録文化財 (建造物)	吉久は、承応4年（1655）に「吉久御収納蔵」と呼ばれる米蔵が建てられ発展を遂げた村であり、能松家住宅はその吉久地区のほぼ中央にある旧家である。江戸時代以来、米商を営み、財を成した。	
30	有藤家住宅	登録文化財 (建造物)	有藤家住宅は吉久の西側に位置しており、建設当初の形式をよく保持している町家として貴重である。明治期には石灰俵編みと農業を生業としていた旧家である。	

31	高岡商工会議所伏木支所	登録文化財 (建造物)	高岡商工会議所伏木支所は、明治 43 年 (1910) に伏木銀行として建てられた土蔵造りの建造物である。土蔵造りに洋風の意匠をふんだんに採り入れた銀行建築となっており、伏木みなと町の繁栄と近代化を象徴する代表的な建造物である。	
32	伏木気象資料館 (旧伏木側候所庁舎・測風塔)	登録文化財 (建造物)	伏木の廻船問屋に生まれた大商人「藤井能三」によって、伏木港を航行する船舶の安全のための天候観測施設として建てられた。藤井能三は伏木地区、ひいては高岡の経済発展に尽力した者であり、当施設は全国初の私立測候所であるとともに、伏木港の近代化を物語るものとして貴重である。	
33	丸谷家住宅	登録文化財 (建造物)	吉久地区は「御蔵」を中心にして町並みが築かれた地区である。丸谷家住宅は「米商」「蔵仲間」として有力な家の一つであった旧津和野家住宅を買い取ったもので、現在でも明治期の古い形態を良く残し、表構えも良好に保たれている貴重な建物である。	
34	佐野家住宅	登録文化財 (建造物)	佐野家住宅はかつて高岡米穀取引所の仲買人組合長として活躍した「菅池貞次郎」が建設したものである。重厚な土蔵造りでありながら洋間や上げ下げ窓などに洋風要素を採り入れた姿には、町の発展に貢献してきた歴史を感じさせる。	
35	清都酒造場	登録文化財 (建造物)	清都酒造場は、製造商品名「勝駒」の木製看板を主屋板庇に寄せ、現在も造り酒屋を営み続けている老舗である。明治 33 年 (1900) の高岡大火以前の貴重な町家建築として酒屋らしい店構えを見せており、高岡の歴史を味わうことが出来る。	
36	越中福岡の菅笠製作技術	重要無形民俗 文化財	加賀前田家 5 代当主前田綱紀が奨励したことから発展し、今に伝える越中福岡の菅笠製作技術。菅草の栽培から出荷までの全工程が一貫した生産体系で維持されている例は国内で唯一とも言え、当初の生産・製作形態を保ちながら継承する姿はまさに、『一人、技、心一』を伝えている。	
37	菅笠問屋の町並み	— (景観形成重点区域)	福岡の菅笠は江戸時代から加賀笠として広く知られるようになり、一大生産地として全国シェアの 9 割以上を占めるほどとなった。旧北陸街道沿いに伝統的な町並みが良く残っており、菅笠生産による賑わいを物語っている。	

構成文化財の写真一覧

1 瑞龍寺



2 前田利長墓所



3 五福町神明社本殿



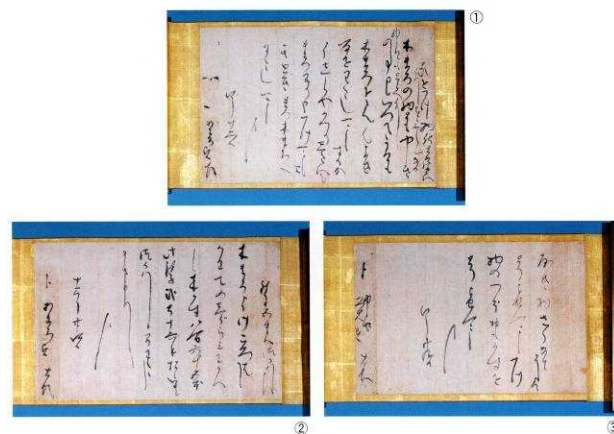
4 大手町神明社拝殿



5 高岡城跡



6 前田利長公御親書



7 高岡御車山



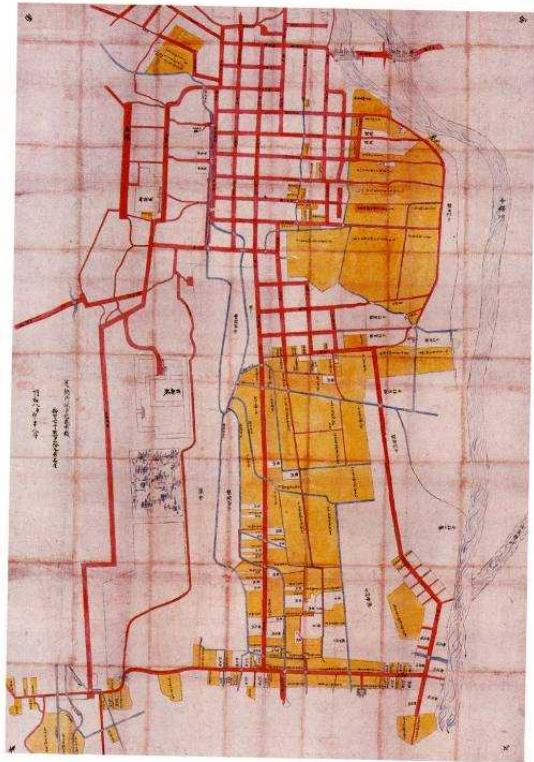
8 高岡御車山の御車山行事



9 与四兵衛頭彰碑



10 明和八年製高岡町図



11 山町筋重要伝統的建造物群保存地区



12 菅野家住宅



15 金屋町重要伝統的建造物群保存地区



13 筏井家住宅



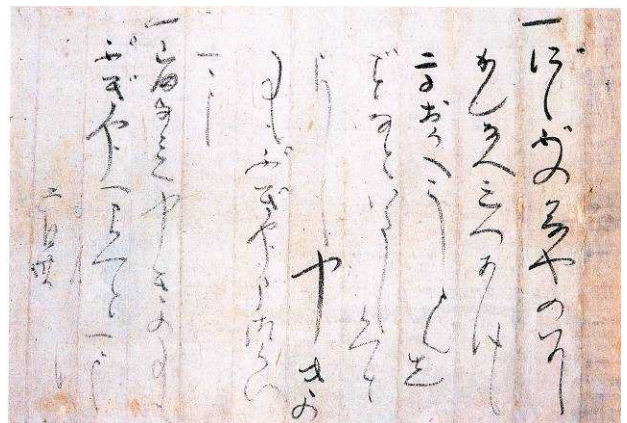
16 仁安の御綸旨



14 土蔵造りのまち資料館（旧室崎家住宅）



17 前田利長書状



18 有儀正八幡宮



19 銅造阿弥陀如来坐像



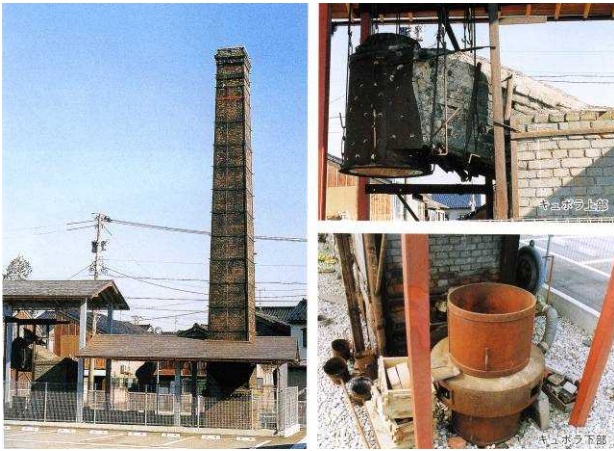
20 高岡鑄物の製作用具及び製品



21 御印祭



22 旧南部鑄造所キュボラ及び煙突



25 勝興寺



23 梵鐘龍頭木型



26 伏木港



24 戸出御旅屋の門



27 北前船資料館（旧秋元家住宅）



28 棚田家住宅



31 高岡商工会議所伏木支所



29 能松家住宅



32 伏木気象資料館（旧伏木側候所庁舎・測風塔）



30 有藤家住宅



33 丸谷家住宅



34 佐野家住宅



35 清都酒造場



36 越中福岡の菅笠製作技術



37 菅笠問屋の町並み

